

米国アトランタでのがん登録実務者研修  
に参加して井上 真奈美  
愛知県がんセンター研究所疫学・予防部

以前放射線影響研究所小山先生から、米国 UCSF における腫瘍登録職員研修会の参加報告がありました。今回はアトランタでのがん登録実務者研修についてご紹介します。

ご存知の通り、米国ではがん登録が盛んで、そのため法の整備や腫瘍登録士の養成が積極的に行われています。その中でジョージア州アトランタにあるエモリー大学では、多くのがん登録に関するトレーニングプログラムが提供されており、このうち、2001年3月26-30日に行われた、“Principle and Practice of Cancer Registration, Surveillance, and Control”というコースに参加する機会を得ました。

参加者は38人(満席)、プラス講師2名(Drs. Young & Roffers)で、大半の参加者は、州あるいはその地域のがん登録室か院内のがん登録室に所属していました。外国人は他にドイツからの参加者がありました。1週間のプログラムという気軽さが受けて、いつも事前に満席になってしまうようです。このコースはがん登録の実務をはじめと問もない者が対象となっており、更に極めたい人には、“Advanced Cancer Registry Training Program”というのも年に数回提供されています。

コースの内容は、まず Pretest がありますが、コーディングや記述疫学に関する知識を問うもので、わが国でがん登録をこなしていれば、平易な内容です。それが終了するとがん登録概論から、カルテからの Case finding、abstract、staging、がん登録従事者向けの主要部位がんに関するレクチャがあります。この主要部位とは、米国にとっての主要部位がんですので、例えば胃がんなどのレクチャはありませんでした。各部位がんのレクチャが終わると、その部位に関する例題が渡され、実際にカルテからがん登録用に情報を要約する演習をします。この演習の前には、情報保護に関する同意書をきっちりと書かされましたが、使用する教材は、本物のカルテや検査結果、あるいは死亡診断書のコピーが渡されますので、かなり臨場感があります。米国の場合、すべて詳細なマニュアルを作り、そのルールにのっとった要約を行っていきませんが、症例にはわが国と同じく、単純でないものも多く存在しますから、実際どのように解決するのかにつ

いてもその割り切り加減についてもきちんと教えられます。このとき、講師と参加者とのかなり白熱した討論になります。連日朝8時半から5時まで続き、夜は毎日4-5症例の要約が宿題となります。夕食は同じ宿泊施設(大学から1ブロック)に泊まっている参加者とともにっておりましたが、友好を深めるというより、各症例の勉強会のようになっていました。医者の書くカルテの字は難解という定説(?)がありますが、これは万国共通で、手書きの解読にもっとも時間がかかりました。また米国の場合、秘書などがタイプしているケースが結構あるようでしたが、それも元の原稿が読めないのか、ところどころやむを得ず空白になっているものもあり、どこも同じだなと感じました。最終日の最後の時間に posttest がありますが、これはコースを休まずこなしていれば、満点を取れるような内容でした。このテストの採点が済んでから修了証をいただけます。この修了証は、米国の腫瘍登録関連の仕事をする上で多少役に立つと聞きました。

参加に当たっては、まずコース開始前に SEER テキストのうち数冊のリーディングをこなしておかなければなりません。更にコースには4-5冊の本を持参しなければなりません。これは SEER や AJCC から出ているコードやステージに関する本です。市販本で所持していなかったものは、本屋さんでは入手に時間がかかるものがほとんどで、出版社から直接購入しました。この回から新しく ICD-O-3 を用いたコーディング演習が行われましたので、大変ためになりました。私の場合、日常は ICD-10 と ICD-O を用いたコーディングを行っておりますので、ICD-O のみを用いたコーディング法を学べたことも有意義でした。

何よりも、米国のがん登録従事者は、がん登録が重要であることを心から認識しているようで、レクチャには自信と迫力が感じられ、更に始めたばかりの参加者が安心してついていく、という場面を目の当たりにし、これが、あのような優秀な精度を作り出していくのだということ強く実感しました。

このコースに興味のある方はホームページ <http://www.sph.emory.edu/GCCS/training/index.html> に最新の情報が掲載されていますのでご参照ください。なお、コースは英語で行われ、英語のほか、医学英語で書かれたカルテ等を読む力が必要です。